
論 説

カシュガルにおける
ジャディード運動
——ムーサー・バヨフ家と新方式教育——

大 石 真 一 郎

は じ め に

クリミア・タタールの啓蒙思想家イスマイル・ガスプリンスキイ Ismā‘il Gaşprinski は、無知と因習に束縛されたムスリム社会を改革し、ロシアにおけるムスリムの地位の向上と権利の獲得をはかるために、1884年に郷里バフチサライに近代的な小学校を開いた。この学校で行われた「新方式」*uṣūl-i jadid* と呼ばれる教育方法は、以後これを支持するジャディード（革新派）の運動として、ロシア領内のムスリム地域だけでなくオスマン帝国などにも広がり、彼が考案した「共通トルコ語」とともに、トルコ諸語を母語とする人々の「トルコ人」意識を覚醒させることになった。このため、1910年代になると、ロシア当局はジャディード運動にロシア帝国の統合と安全を脅かす「汎トルコ主義」と「汎イスラム主義」の危険性を認め、これにたいする統制を強めた⁽¹⁾。また、新方式教育は、第一次バルカン戦争の危機を経てオスマン帝国の実権を掌握した「統一と進歩委員会」により、対外政策として掲げた汎トルコ主義と汎イスラム主義を帝国外のトルコ系ムスリムに宣伝するための手段として利用されることもあった。

ロシア領と隣接する東トルキスタン（中国領トルキスタン、新疆）

のカシュガルやグルジャなどの主要都市でも、遅くとも1910年前後には、現地のトルコ系ムスリム（主に現在のウイグルと呼ばれる人々）のジャディードによって新方式教育が試行されるようになる。濱田正美氏は、東トルキスタンへの新方式教育の導入について、中国の漢語教育による同化政策への危機感とロシア領ムスリム地域やオスマン帝国からの民族主義思想の影響を指摘し、特に1914年に「統一と進歩委員会」からカシュガルに派遣されたトルコ人教師アメト・ケマル Ahmed Kemal の活動を詳しく紹介している。また、新免康氏と王柯氏は、この時期の啓蒙運動を1930年代の一連の反乱と東トルキスタン共和国に収斂する独立運動の思想的背景として位置付け、その意義を高く評価している⁽²⁾。

これらの先行研究にたいして、本稿は、カシュガルの新方式教育の先駆けとなったムーサー・バヨフ家 Müsä Bäyoflar の活動を中心に紹介し、当地のジャディード運動の概要とこれにたいするムスリム社会や中国当局などの対応から、新方式教育がカシュガル、さらには東トルキスタンのトルコ系ムスリムにとってどのような意義を有したのかを改めて検討するものである。これはまた、十分な研究がなされてきたとは言い難い1910年代の当該ムスリム社会の政治的、社会的状況の一端を提示することにもなろう。

主な史料としては、オレンブルグで発行され、ロシア・ジャディードの代表的な刊行物であったタタール語の新聞『ワクト』[1906/2/21–1918/1/26]と、その同じ出版社による雑誌『シューラー』[1908/1–1918/1]⁽³⁾を用いた。これらは東トルキスタン史研究ではほとんど利用されてこなかったが、管見の及ぶ限りでは、短いものも含めると前者に180、後者に50ほどの関連記事が掲載されている。グルジャ、ウルムチ、カシュガルなどに駐在するタタール人通信員による記事とともに、僅かではあるが当地出身者からの寄稿は、当時の東トルキスタンのムスリム社会の状況を窺う上で貴重な情報を提供している。

1 ムーサー・バヨフ家

ヤークーブ・ベク Ya‘qūb Beg 政権 (1865–1877) 瓦解後、清朝は東トルキスタンを再征服すると、ここに新疆省を設置し、中国人行政官を派遣して本土と同様の州県制を施行した。これにより、以前の清朝支配において各地の將軍、大臣の監督の下にトルコ系ムスリム住民にたいする賦税、力役の徵発に当たり、免税などの諸特権を享受してきたベクと呼ばれる民族行政官は廃止された⁽⁴⁾。さらに、多角的・自足的農業を商業的農業に転換させた故の略奪的農法による生産力低下と、中国側の政策変更に伴う地租徵収の開始は、これまでの大規模な土地所有者であった旧ベク階層の凋落を促した。一方、1881年のサンクト・ペテルブルグ条約によって東トルキスタンでの免税権を得たロシア籍商人の進出は、当地の対ロシア貿易をも飛躍的に増大させた。こうした中で、商工業に従事するバイ bāy (富豪) と呼ばれる有力者層の形成が進んだ⁽⁵⁾。

中でも、フセイン Husayn とバーハウッディン Bahā’ al-Din の兄弟は、国際貿易に従事し、東トルキスタンだけでなく、アルマ・アタ、ビシュケク、セミパラチンスク、タシュケント、アンディジャン、モスクワなどのロシア領の諸都市にまでその支部、出張所を置くバイであった。彼らは父ムーサーの名に因んで「ムーサー・バヨフ家」の商号で呼ばれた⁽⁶⁾。

ムーサー・バヨフ家はカシュガル城市 řahr から24kmほど北に位置するウストユン・アルトゥシュ Üstün Artūš を郷里とし、19世紀末までにはカシュガル地方有数のバイとなっていた。時期は明らかではないが、その後、彼らの経済活動の拠点はカシュガル地方から天山以北のイリ地方、特にその中心地グルジャに移された。グルジャは対ロシア貿易の表玄関として重要な地位を占め、タタール人をはじめ多くのロシア籍商人が活躍していた。彼らを含めたグルジャのムスリム商人の中にあっても、「ムーサー・バヨフ兄弟」 Burādarān-i Mūsā Bāyoflar 社は最も有力な商社の一つと見做されていた⁽⁷⁾。彼らは、商業活動だけでなく、フランス、ドイツ、イ

ギリスから技師を招聘して、様々な工場をも経営した。特に1909年12月にグルジャで竣工された皮革工場は、ドイツから購入された電動式の機械設備を有し、ドイツ人技師と共に現地労働者数十人が勤務する近代的な工場であった⁽⁸⁾。

中国内地では1911年10月の武昌蜂起を契機として辛亥革命が勃発するが、東トルキスタンのウルムチとイリでもこれに呼応した革命派は、それぞれ12月28日と翌年の1月7日に武装蜂起を試みた。新疆省政府は省都ウルムチの革命勢力を僅か二日で鎮圧したが、イリの革命派は1月10日にイリ臨時政府を樹立し、当地のドンガン（回族）やトルコ系ムスリムらの協力も得て、省政府と対峙した。ムーサー・バヨフ家のフセインもまたこの革命軍にたいして革靴や鞍その他の物資を提供した⁽⁹⁾。

イリ臨時政府の総司令部長となる楊纘緒は、蜂起前の1911年4月23日に国境近くの町ジャルケントヘロシア陸軍中佐カラーキン Калакин を訪ねた際に、ムーサー・バヨフ家の工場にも寄ったことがあった。恐らく、楊はこれらの訪問によって間近に迫る武装蜂起の準備を進めていたのであろう。蜂起後の1912年2月25日にも、楊はバハーウッディンの邸宅を訪ね、翌日にはそこで楊のための宴会が催された。その席にはイリ臨時政府の外交部長馮特民らの他に、ロシア側の駐グルジャ領事ディヤーコフ Дьяков や、駐留軍司令官、郵便局長、ロシア・アジア銀行局長らが顔を並べた⁽¹⁰⁾。

イリ臨時政府とウルムチの新疆省政府が交戦状態に入ると、これに乗じてボロタラでは共和制に敵対する3000人ほどのカルマク・モンゴル人がムーサー・バヨフ家の所有地を略奪した。また、グルジャからカシュガル、ホタン、マナスなどへの経路が分断されて商業活動は停止し、商人たちに多大な損害をもたらした。このため、3月初めにグルジャのロシア籍や中国籍（即ちムーサー・バヨフ家）の商人たちはその解決をロシア領事に要請した⁽¹¹⁾。宣統帝が退位すると、新疆省政府も中華民国に帰順し、3月15日には中央臨時政府によって新疆巡撫の袁大化は改めて都督に任命された。このこともあって、4月には省政府とイリ臨時政府との間で和平協議が始まられたが、

それはタルバガタイのロシア領事館で行われた⁽¹²⁾という。

ムーサー・バヨフ家のイリ臨時政府やロシア領事との接触が如何なる政治的関心に基づいたものであったのかは定かではない。しかし、彼らは、貿易の相手となるロシアや、イリ地方の公権力との良好な関係を自らの経済活動に有益なものと位置付けていたに過ぎないとしても、それらとの繋がりを持ち、イリ地方の政治に何らかの形で関与しうるだけの影響力を有していたことは確認できよう。

7月8日に締結された協定とその後の折衝を経てイリ臨時政府は新疆省に併合され、和平協議中に省都督に就任した楊增新は東トルキスタン全土の政権を掌握することになった。彼はイリ側の要人を懷柔する一方で、その革命勢力の分散と消滅に努めた。楊績緒はカシュガル提督に任命されたが、まもなく、中国本土に帰還した⁽¹³⁾。

このような情勢の中、民国中央政府によって新疆省の財政調査に派遣された謝曉鐘は、1916年5月15日にグルジャでフセインの姿を目にしている。謝は現地商人を集めて収入印紙の貼付を実施するよう呼び掛けたが、フセインは敢然と斯くの如き通達が未だ正式に公布されていない旨を指摘して、ただ一人これを拒否した。また、謝はグルジャの中国籍商人の中で最も有力なフセインが、革命後に暴落したイリ紙幣の維持のために一銭も費やさなかつたことを痛烈に非難している⁽¹⁴⁾。これらは、商業上の不利益を回避することを目的としていたにせよ、フセインがイリ臨時政府併合後の中国人当局者の政策を快く思っていなかったことを示すものであろう。

2 新方式教育の導入

新方式教育が導入される以前のカシュガル地方には、トルコ系ムスリムの子弟を対象として、以下の三種の初等教育施設があった。

1. 宗教学校（マクタブ）。近代化以前のイスラム世界に広く見られた宗教教育を施す民間の学校であり、カシュガル城市全体で70—80ヶ所に、また村落部にはその大小に応じて数ヶ所に設けられていた。そこでは一教室に様々な年齢や知識水準にある生徒たちが集められ、一人の教師がそれぞれの学習速度に応じた課題を与えるとい

う方法で授業が行われたために、その非効率性は否めなかった。また授業内容もコーランやアラビア語、ペルシア語の作品の暗唱のみを偏重するため、その意味を解せず、卒業した生徒のほとんどが文字を書くことすら出来ない状態であった⁽¹⁵⁾。

2. 漢語学校。19世紀後半に清朝による再征服を経て新疆省が設立された後、トルコ系ムスリム住民が大半を占める当地の「内地化」即ち漢化を促進するために「義塾」や、その後の中国本土での教育近代化の所産である「学堂」という漢語習得によって公務を担うる人材の育成を目的とした主に官立の学校である。後者は清末には全新疆で500校以上が開かれ、15000人以上が学んだ。また、疏附県(カシュガル城市を中心とする行政単位であり、当時はウストュン・アルトウシュもこの中に含まれていた)所轄内には16校が開設されていた。しかし、「義塾」ではムスリム児童たちに中国風の服装や儒教教育が強制されたためにムスリムたちの反発を買い、また、これを改めた「学堂」にたいしても彼らの不信感は拭われず、漢語学校は歩々しい成果を上げなかつた⁽¹⁶⁾。さらに、1911年になると内地の辛亥革命の影響を防ぐべく、袁大化は教育経費の全てを軍費に充当したため、それまでの学堂の大多数が閉鎖された⁽¹⁷⁾。

3. ミッショナルスクール。1894年からカシュガルで布教活動を始めたスウェーデン・ミッションが病院や印刷所と共に開設した学校である⁽¹⁸⁾。そこに集められた当地ムスリムの孤児や貧民の子供たちは衣服と食事を支給される一方で、聖書を読み、聖歌を歌い、また、ヨーロッパ人のムスリムにたいする優越を教え込まれた⁽¹⁹⁾。

これらにたいして、ガスプリンスキーによって始められた新方式教育は「発声方式による読み書きの訓練、イスラムの基本知識に加えて数学、理科、歴史、地理、ロシア語などの基礎的な教養諸科目の導入、さらに母語による教科書や教室の使用などを特徴とする⁽²⁰⁾」ものであった。

国際貿易や近代的な工場経営に携わったムーサー・バヨフ家のような実業家や、改革派ウラマーなどの知識人にとって、郷里の後進性の病根とも言うべき現行の宗教学校にたいする新方式教育の優越

は明白であった。また、ガスプリンスキーがロシアの同化政策を危惧したように、東トルキスタンでも1911年までは漢語学校による「漢化」の危機感が、そして、特にカシュガル地方ではその後も、ミッション・スクールに集められたムスリムの子供たちの「キリスト教徒化」にたいする危機感が存在していたと思われる。新方式教育はこれらの問題に対処する術として有効となるはずであった。

1909年6月23日の『ワクト』紙に掲載されたグルジャからの報告には、

ムーサー・バヨフ家に教えを受けた27人の孤児の女子たちの試験があった。去年の如く、女性教師サラ・ハヌム Sara Hanım は彼女たちを良く教育し、数種の手芸を教え、計算、地理、宗教教義、聖クルアーンについて学ばせた。後に先述のバイたちの「慈悲の家」Dār al-səfeqqet という孤児学校でも試験があった。ここでも子供たちに計算、地理、簿記が教えられた⁽²¹⁾。

とあり、この内容から遅くとも1907-8年までにはムーサー・バヨフ家が運営する学校がグルジャに存在していたと推察される。また、男子学校であると思われる「慈悲の家」では、トルコで学んだ教師たちがイスタンブルの学校プログラムで教育を行い、更にはロシア語や中国語も教えられていた⁽²²⁾。これらの授業科目を見る限り、商業活動や工場労働に必要となる実用的なものが多く、ムーサー・バヨフ家がこれによって自身の商工業業務に従事しうる優秀な労働力の育成を企図していたことが看取される。

一方、カシュガル地方のウストュン・アルトゥシュでもこの頃、既にムーサー・バヨフ家のフェインが慈善協会を設立して学校や図書館を建設したり、個人的に留学生への資金援助を行っていた⁽²³⁾ことが知られている。ここで行われた教育も先のグルジャの学校と同様のものであったろう。しかし、それは彼らの影響力の強いウストュン・アルトゥシュの域を出るものではなく、カシュガル地方全体からすれば極めて特異な存在であった。グルジャには彼ら以外にもロシア籍のタール人や現地ムスリムによって開かれた幾つかの新方

式学校や閲覧室があり、またトルコ語の新聞や雑誌が出版され⁽²⁴⁾るなど、開明的な気風に満ちていたのに比べ、カシュガル地方の中心地であるカシュガル城市においては保守的な傾向が依然として強かつた。

その中で、高名な改革派ウラマーであるアブドゥルカーディル・ダームッラー ‘Abd al-Qādir Dāmullā (以下、アブドゥルカーディルと略す) は1912年にカシュガル城市で最初の新方式による学校を開いた。当時、カシュガルなど天山以南のタリム盆地周辺地域のムスリムが新方式による教育を受けるためには、アブドゥルカーディルに教えを請うことと、年毎にイスタンブル、カザン、ウファ、オレンブルグのような先進的なムスリム地域に10-15人を留学させるという二つの方法が採られていた⁽²⁵⁾という。

東トルキスタンの知識人の中でも購読されていた「ワクト」や「シユーラー」などの刊行物はロシア領内の情報だけでなく、オスマン帝国やヨーロッパ諸国の情勢を詳細に伝えていた。また、留学以外にも交通手段の近代化に伴い、商業活動や巡礼等の目的でこれらの先進地域を往来する者は相当な数に上った。その中でも聖地巡礼者は多く、1909年にはカシュガルからだけで3500人が巡礼に赴く⁽²⁶⁾ほどであった。

ヤーカーブ・ベク時代に進展を見た東トルキスタンとオスマン帝国との関係は、その後も継続していた可能性はある⁽²⁷⁾が、両者の関係は1910年前後にさらに深まりつつあった。1909年にイスタンブルからカシュガルへ「オスマン科学使節団」 ‘Osmanlı Fen Hey’eti が訪れ、当地のムスリム住民と交流した。これにたいして1910年には、立憲制トルコの誕生とメフメト・レシャト Mehmed Reşad のスルタン即位を慶賀するために、東トルキスタンのムスリムを代表してカシュガルのシェイフ・サイード Šeyh Sa’id という人物がイスタンブルを訪れ、シェイフルイスラームとマフムート・シェヴケト・パシャ Mahmud Ševket Paşa に謁見した⁽²⁸⁾。

1912年以降には、バルカン戦争によるオスマン帝国の窮状を伝え聞いたカシュガルやグルジャの現地ムスリムたちは、多額の義援金

を数度にわたってトルコの「イスラーム赤三日月（赤十字）」Hilāl-i Ahmer などに送った⁽²⁹⁾。また、ブルガリアに侵略されたエディルネをエンヴェル・ベイ Enver Bey 指揮下のトルコ軍が奪還したという知らせが1913年7月11日の朝にグルジャに伝えられると、バザール内の全ての商店は営業を中止し、家々には旗を掛け、楽器を演奏して喜びを示した。グルジャの全ての人々は郊外の「ギュルシェン・バーグ」という庭園に集まり、バハーウッディン主催による祝宴が行われた⁽³⁰⁾。

このように、当時、東トルキスタンのトルコ系ムスリム住民の中には、オスマン帝国の情勢に关心を示し、そこに暮らす人々にたいして好意を寄せる者がいた。彼らにとって、宗教を同じくし、言語も比較的理解しやすいオスマン帝国やロシア領ムスリム地域の人々と自分たちを結び付けるものが、「ムスリム」であったのか、それとも「トルコ人」であったのかは、さらに検討を要する問題である。しかし、情報や人の往来は、確実に「トルコ人」意識を彼らの中にも浸透させつつあったであろう。同様に、それは、ムーサー・バヨフ家やアブドゥルカーディル以外の人々にも、当時の先進的なムスリム地域で行われていた新方式教育の必要性を認識させるものであったと考えられる。

3 新方式教育を巡る相剋

ムーサー・バヨフ家やアブドゥルカーディルらはカシュガル地方の新方式教育に先鞭をつけたが、それは直ぐにその住民たちを新方式へと向かわせるものではなかった。アブドゥルカーディルがカシュガル城市に開いた学校も、翌年には彼の後任に生徒の一人を就けたためにその評判は急落し、住民の支持を失うことになった⁽³¹⁾。

このような状況にあったカシュガル地方に、新方式教育によって「トルコ精神」を喚起することを任務とし、「統一と進歩委員会」から一人のトルコ人青年が派遣されることになった。「統一と進歩委員会」の指導者の一人で、オスマン政府の内務大臣を務めていたタラート・パシャ Talât Paşa は、ムーサー・バヨフ家の一員でメッ

カ巡礼の帰路イスタンブルを訪れていたアブルハサン *Abū'l-Hasan* と会談した際、彼にカシュガルへ派遣することになる教師の受入れを求めた。その教師には、アブルハサンのためにエディルネ視察の案内役を務め、また以前から東トルキスタン出身の留学生たちとも交遊のあったアフメト・ケマルが選ばれた⁽³²⁾。

アフメト・ケマルは、1914年3月14日にウストュン・アルトゥシュでバハーウッディンの歓待を受けた。その後、彼は当初の任務に従つてカシュガル城市に学校を開く可能性を探りつつ一ヶ月ほどを過ごしたが、城市的有力者ウマル・バイ 'Umar Bāy の後援を得られなかつたために、その立地をムーサー・バヨフ家の郷里ウストュン・アルトゥシュに変更することになった。4月19日にアフメト・ケマルが校長を務める「統一師範学校」*Dār al-mu'allimin Ittihād* の開校と、その運営のためのイスラム慈善協会の発足が宣言された。これを受けて、既に彼の良き理解者となっていたアブドゥルカーディルや、青年実業家の一人であるハージー・アリー *Hāji 'Ali* らはカシュガル城市にイスラム慈善協会の本部を開設した⁽³³⁾。

しかし、彼らの活動は早々に反対派の非難に晒された。先ず、セリーム・アフン *Selim Ahünd* という保守派ウラマーは「歴史や地理を学ぶことは禁忌である」とのファトワー（法的意見）を出した。また、ウマル・バイは反対派の指導者として、新方式教育の支持者たちに関する誹謗中傷をカシュガル中に広めた⁽³⁴⁾。

ウマル・バイはムーサー・バヨフ家とともにカシュガルで一、二を争う大商人であり、この両者だけが当時のカシュガルでロシアや西トルキスタン（コーカンド）からの商品買付を許可されていた⁽³⁵⁾。特に、ウマル・バイはカシュガル城市での徵税請負の権利を有していた⁽³⁶⁾といわれ、当局とも緊密な関係にあったと思われる。それ故、カシュガル城市でアフメト・ケマルが教育活動を行おうとすれば、彼の後援は不可欠であった。後援を求めるのに先立つて、バハーウッディンは「ウマル・アフン・バイがこの我々の希望を受け入れるなら、わしは奴の馬の糞を拭く仕事も厭うまい！」⁽³⁷⁾と語ったという。この言葉は、それ以前に既にバハーウッディンとウマル・バイの間

に何らかの争いがあったことを想像させる。その原因の一つとしては、経済活動上の競争を挙げることができよう。また、当時の東トルキスタンのムスリム社会内では諸々の係争事が出身地の違いに起因し、特にカシュガル城市とアルトゥシュの住民の間には根強い不信感があった⁽³⁸⁾とされる。この他にも、16世紀後半から東トルキスタンでの伝道活動を始め、宗教的権威を築いた所謂カシュガル・ホーリヤ家のイーシャーニーヤ（白山党）とイスハーキーヤ（黒山党）の抗争に関連付け、バハーウッディンが前者を、ウマル・バイが後者を支持していた⁽³⁹⁾ことや、単に「ムーサー・バヨフ家が名声を得るようになり。ウマル・バイより上に出るのを恐れたから⁽⁴⁰⁾」ということを原因に挙げる者もいた。二つの最有力者が反目し合っていた所に、カシュガルでの新方式教育の実施を困難ならしめた要因の一端を窺うことができよう。

伝統的な教育体系の上に安坐することで社会的な地位と権威を保持してきた保守派ウラマーは、ロシア領内のジャディード運動において最も強力な敵対者であった⁽⁴¹⁾。確かにカシュガルの場合でも、新方式教育に最初に反対の声を上げたのはセリーム・アフンのような保守派ウラマーであったが、その立場は些か微妙なものであった。というのは、当時、カシュガルではカーディーやムダッリスなどの宗教的職務が、ウラマーの選出によるのではなく、バイなどムスリム内の有力者の指示によって恣意的に決められており⁽⁴²⁾、ウマル・バイとセリーム・アフンの間にも何らかの利害関係が成立していたと思われるからである。セリーム・アフンは、彼のファトワーがもとで開かれた討論会で、アフメト・ケマルの演説を一旦は是と認める発言をしており⁽⁴³⁾、必ずしも強力な敵対者ではなかった。アフメト・ケマルは「セリーム・アフンのような利己的なムッラーは若干の怠惰なバイたちから得た力によって、この民族的企図の全てに反対した⁽⁴⁴⁾」と言う。ウマル・バイが保守派ウラマーに与えた「力」とは、反対活動に人々を動員するための資金援助や、立場を利用しての公権力への働きかけであった。逆に、ウマル・バイ側にすれば、セリーム・アフンを通じて「シャリーアの遵守」という宗教的な正

論を振りかざすことで、個人的な動機、即ちムーサー・バヨフ家への敵意を隠蔽することにもなるのである。

新方式教育への反対派の非難が高まる中で、カシュガル当局はハーヴィッティンを事情聴取することになった。彼はそれ以前に当局に打診した際に「政府の財政政策と治安を侵害しなければ、どのような行動にも自由がある。特に教育事業については、当局は貴方にたいして極力支援もしよう⁽⁴⁵⁾」との回答を得ていたが、今回もまた当局はウストュン・アルトゥッシュでの教育活動を認め、1914年9月14日付で彼に免許状を交付した。一方、ウマル・バイが影響力を有するカシュガル城市では、当局はハージー・アリーらが運営する慈善協会本部を閉鎖させた⁽⁴⁶⁾。

翌年には、ウマル・バイは、更にアフメト・ケマルらの教育活動に掣肘を加えるためにカシュガル駐在ロシア領事に働きかけた⁽⁴⁷⁾。アフメト・ケマルが「ウマル・バイはロシア領事を招いて宴会をするために、無条件で500ルーピルのシャンパンや様々な酒を費やした⁽⁴⁸⁾」と指弾するような両者の関係がいつ頃に遡るのかは不明であるが、第一次世界大戦の戦局を睨みつつ東トルキスタン在住トルコ人の活動に、汎トルコ主義や汎イスラム主義、またはその同盟国ドイツの影を見るロシア領事は、ウマル・バイたちの要請に喜んで応えたであろう。ロシア領事は民国中央政府にトルコ人教師のことを通報し、そこから報告を受けたウルムチの楊增新はカシュガル当局に調査を命じた⁽⁴⁹⁾。

このような状況の中で性急な対応を迫られたアフメト・ケマルは、開校後一年半足らずで課程を終了し、公開試験を実施して60名の生徒の内27名に初級師範の資格を賦与した。その後、城市ではハージー・アリーらが中心となって師範学校の卒業生を教師とする初等学校を開くことになった⁽⁵⁰⁾。ウマル・バイはこれにたいしても、彼らが「中国人からのトルキスタン奪還を誓約した」という中傷をカシュガル当局に密告したために、当局はアフメト・ケマルとともに、この学校に関与した青年たちを逮捕し、学校を閉鎖した⁽⁵¹⁾。

さて、濱田氏は、アフメト・ケマルが生徒たちにオスマン帝国の

スルタンが彼らのリーダーであることを教え込んだことや、彼らがトルコの行進曲を歌っていたことから、アフメト・ケマルの教育が汎イスラム主義、汎トルコ主義的傾向が強いものであったことを指摘している⁽⁵²⁾。

トルコ人教師アフメト・ケマルは、カシュガルのムスリム住民に「トルコ人」としての自覚を促すことを、任務として強く感じていた。それは、「トルコ人同胞」であるカシュガルのトルコ系ムスリム住民に「イスラムの盟主」たるオスマン帝国への協力を求めるものであり、第一次世界大戦の最中では、正しく汎トルコ主義、汎イスラム主義として極めて政治的な意味合いを持つはずのものであった。しかし、それは彼の活動を支持したカシュガルのジャディードたちがこれらの政治的イデオロギーを受け入れたことを直ちに意味するのではない。

前章で、東トルキスタンとオスマン帝国との関係について触れた際に指摘したように、東トルキスタンのトルコ系ムスリムの中にはオスマン帝国やそこで暮らす人々に好意を寄せる者がいた。従って、オスマン帝国にたいする「トルコ人同胞」や「イスラムの盟主」という意識は、恐らくは、彼らの中に既に存在していたか、または容易に受け入れうるものであったと思われる。しかし、それらの意識が、ロシアにせよ中国にせよ、その支配下のトルコ系ムスリム自身にとって汎トルコ主義や汎イスラム主義としての意味を持つのは、彼らが異民族、異教徒の支配を否定する場合か、または逆に、支配する側が支配されるトルコ系ムスリムの活動を牽制、弾圧するための方便にする場合である。

しかしながら、当時、カシュガルで新方式教育に携わっていた人々が中国支配を明確に否定するというようなことは、少なくとも史料上には現れない。城市での活動を指導したハージー・アリーは、『ワクト』への寄稿の中で、先に慈善協会本部が閉鎖されたことを「若干の敵が無根の中傷を広めて政府役人を訝った。その結果、協会は政府によって閉鎖された」と述べるが、ここに中国当局への強い批判を見ることはできない。彼はその文中で、新方式教育が「宗

教と民族を辱めている」スウェーデン・ミッションの活動への対策であることを主張し、にもかかわらず、これに反対するセリーム・アフンを名指しで非難することに力を入れているのである⁽⁵³⁾。

アフメト・ケマルもまた、たとえ当局による逮捕や学校の閉鎖という事態に見舞われても「この罪と責任は当局にあるのではなく、カシュガルの若干のウラマーとウマル・アフンという名の宗教感情、民族感情、愛国感情を欠如し、これらの神聖な感情の無慈悲な仇である畜生の狐に帰すべきものであった。この裏切者はハハーウッディン・バイ氏への個人的な怨恨の極みを常に学校によって晴らすように努めていた⁽⁵⁴⁾」と認識し、中国当局に直接的な批判を向けることはなかった。この認識は、恐らくカシュガルで新方式教育に携わっていた者たちに共通のものであったであろう。彼らが対決すべき相手は中国当局ではなく、同じムスリム住民の内部にこそあったのである。

ところで、アフメト・ケマルをカシュガルに受け入れたムーサー・バヨフ家の意図はどうであったのだろうか。彼らは、オスマン帝国への接近によって汎トルコ主義や汎イスラム主義の政治的な力を利用することを考えていたのだろうか。確かに、先にイリ地方において革命政府を支援していたムーサー・バヨフ家が、その新疆省への併合後には中国当局の政策を快く思っていなかつたことは指摘した。しかし、ムーサー・バヨフ家の側が元々、トルコ人教師の招聘を求めていたという史料はない。トルコ人教師のカシュガルへの派遣は「統一と進歩委員会」側がムーサー・バヨフ家に要請したものであった。だとすれば、彼らの方は「統一と進歩委員会」の要請をオスマン帝国への敬意ないし親近感から了承し、アフメト・ケマルの受入れを純粹な啓蒙活動の一環として捉えていたに過ぎなかつたという可能性も十分に考えられる。

では何故、カシュガルのジャディードたちは中国支配にたいして否定的な言動を示さなかつたのだろうか。先述のように、ハージー・アリーはスウェーデン・ミッションの活動にたいしてアイデンティティの危機を意識していたが、一方、漢語学校による「漢化」への

危機感は、その閉鎖または縮小とともに、1910年代のカシュガルではほとんど問題とされていなかったと思われる⁽⁵⁵⁾。また、濱田氏は「塩の義務」という言葉を以て、現実の統治体制にたいして忠誠を誓うか、もしくは容認することも彼らの倫理観を規定する一面であつたことを明らかにしている⁽⁵⁶⁾。濱田氏が分析の対象とした『ターリーヒ・アムニーヤ *Tārih-i amniyya*』を著したアクス地方出身のムッラー・ムーサー *Mullā Mūsā* は清朝皇帝にたいする忠誠を是としたが、それと時代的にさほど変わらないカシュガル地方に、同じく当時の共和国政府を容認する人々がいたとしても不思議ではない。

1913年5月に『ワクト』紙上で紹介されたアブドゥルカーディルの編集局宛の手紙には、

中国政府は、北京の議会に代表者を選出することについてカ
シュガル周辺のムスリムたちに幾度か布告した。また、北京の
ムフティたるワン・アフン・アブドウッラフマン *Wān Ahūn*
'Abd al-Rahman と北京イスラム協会会長のアブーバクル・
アフン *Abūbakr Ahūn* もこれについてカシュガルに幾度か
手紙を書いて勧めた。彼らのこの手紙はカシュガルのムスリム
たちにかなりの影響を与え、行動を起こす契機となった。⁽⁵⁷⁾

と書かれている。ここからも、アブドゥルカーディルをはじめとするカシュガルの知識人や有力者たちが、この布告を歓迎し、アジアで最初の共和制を標榜する中国にたいして、清朝時代以上の期待を寄せていたことは想像に難くない。

以上から、アフメト・ケマルが喚起しようとする汎トルコ主義、汎イスラム主義も、受け手たるカシュガルの住民にとては、当時は単なる親近感か、知識としてのレベルに止まらざるをえないものであったと思われる。しかしながら、その知識は、後に中国支配に疑問を抱き、それが敵意へと変わった時には、本来の意味を以て人々に意識されるようになるはずのものでもあった。

4 その後のジャディードたち

75日間の監禁生活を送ったアフメト・ケマルは教育活動に関与し

ないという条件で釈放された。その後、1915年12月23日には新たに疏附県知事に着任した馬紹武の勧告により、バハーウッディンは巨資を投じて城市内のヤールバーグ区に学校を開校した。この学校は当局の監督下に置かれ、漢語で教えることが条件とされていたために、まもなくしてその生徒数は激減した。アフメト・ケマルは当局の命令に反して、その後も密かに門生や支持派の青年たちとの関係を続けていたが、中独国交断絶後の1917年7月には、ついに当局は彼をクチャに護送することを命じた⁽⁵⁸⁾。

アフメト・ケマルが去り、またロシア十月革命後まもなくして『ワクト』や『シューラー』が廃刊すると、我々はカシュガルの新方式教育を支持したジャディードたちに関する貴重な情報源を失うことになる。その後の彼らの活動は判然としない。

ムーサー・バヨフ家の援助によって数年間のイスタンブル留学を経験し、1914年に帰郷してアフメト・ケマルの活動にも協力したトルスン・エフェンディ Tursun Efendi は、その後も、ウストュン・アルトゥシュでの教育活動に従事し、多くの生徒たちに薰陶を与えた⁽⁵⁹⁾という。

しかし、東トルキスタンのトルコ系ムスリム住民が、楊增新の統治期間を通じて、その「愚民政策」の下に置かれていたことは各方面で報告されており⁽⁶⁰⁾、彼により「汎トルコ主義」「汎イスラム主義」の嫌疑をかけられたジャディードたちの教育活動もまた閉塞状態にあったと思われる。

1924年にアブドゥルカーディルは青年たちを率いてスウェーデン・ミッションの開業する病院への抗議を携え、馬紹武の官署に向かつて示威行動に出たが、逆に官憲の弾圧を招くことになった。その年の8月16日にアブドゥルカーディルは暗殺された。彼の死はカシュガル中に様々な憶測を引き起こした。その一つは逮捕された実行犯がウマル・バイに傭われたことを自供したにもかかわらず、当局は彼を擁護する立場を取り、追求を怠ったというものである⁽⁶¹⁾。また、この年末には、先にアフメト・ケマルの活動に参加したアブドゥルケリーム・ハン 'Abd al-Kerim Hān ら多数の知識人が逮捕され

て、アクスの監獄に幽閉された⁽⁶²⁾。ムーサー・バヨフ家のフセインとバハーウッディンは1926年と28年に相次いで他界した⁽⁶³⁾。

1926年後半からソ連駐在領事に任命された陳徳立の書記官としてウズベク共和国のアンディジャンに赴いたイーサー・ユースフ・アルプテキンは、「急進的民族主義者」aceleci milliyetçi たるハージー・アリーと出会う。彼は「馬紹武との私の仲は非常にまずい。彼は私をいすれにせよ逮捕し処刑するであろう」と語ったという⁽⁶⁴⁾。ハージー・アリーとともにアンディジャンに逗留する東トルキスタン出身者の中には、同じくアフメト・ケマルの活動を支援した者たちがいた。アルプテキンは彼らの主張を次のように伝える。

〔中国人は〕人民に何もさせない。独立を求めることも、自治を求めるのも、権利を求めるのも。自らの言葉で教育する学校を開くことすら禁じられている。新聞を出し、出版物を刊行し、印刷所を建てるここと、果てはトルコ、西トルキスタン、イディル・ウラル、北カフカース、クリミアから書籍、新聞を取り寄せて読むこと、教えることすら禁じている。何もない。かつて学問と文化の中心であった我が故郷を光なく、道なく、水なき荒廃に導いた。開発と建設のために一銭も費やさなかつたし、費やそうともしない。人々は甚だ困窮している⁽⁶⁵⁾。

彼らの課題は中国人支配によって無知の牢獄に閉じ込められた同胞を解放することであった。ハージー・アリーたちはかつて新方式教育による啓蒙活動に尽力した。しかし、中国政府当局の弾圧に遭い、ウズベク共和国などに亡命していた者たちにとって残された道は、武装蜂起による中国人支配の一掃であった。即ち、「イスラムを開き」、「不信者を殺し、驅逐して、イスラム国家を建て⁽⁶⁶⁾」ねばならなかつた。ハージー・アリーは志半ばにしてタシケントで客死するが、彼らの一部は東トルキスタンへと発つことになるのである⁽⁶⁷⁾。

おわりに

労働力の育成という実利的なものであれ、漢語学校やミッション・

スクールによるアイデンティティの危機への対処法としてあれ、ムーサー・バヨフ家やアブドゥルカーディルらが新方式教育の導入に努めたのは、啓蒙主義的な動機に基づくものであったと思われる。彼らの活動は、いまだ啓蒙されていないムスリム社会内部の対立のために十分な成果を上げることはできなかったが、この挫折を決定付けたのは、彼らの活動に「汎トルコ主義」や「汎イスラム主義」の危険性を認めた中国当局による弾圧であった。しかし、寧ろ、この弾圧こそがトルコ系ムスリムを民族運動に向かわせる契機を与えたのである。その意味で、ムスリム社会内部の対立を顕在化させ、中国当局に弾圧の口実を与えたアフメト・ケマルの活動は、彼が教育した内容とともに、その後の東トルキスタンの民族運動に大きな影響を与えたと言えよう。

1931年に遙か東方のコムルで勃発したムスリム民衆蜂起の戦火は、瞬く間に東トルキスタン各地に広がり、1933年には馬紹武が政権を握るカシュガルにまで及んだ。その年の3月末に、反乱勢力の一つであるオスマン率いる数百名のキルギス部隊がカシュガル攻城戦に備えてアステイン・アルトウシュに現れると、当地だけでなくウストュン・アルトウシュからも青年たちが参集し、350人以上の義勇軍を組織して、その一翼を担った。この義勇軍の軍事訓練は、ウストュン・アルトウシュの新方式学校の卒業生たちによって施された⁽⁶⁸⁾。

オスマンの部隊の入城により中国支配から解放されたカシュガル城市では、その後、アクスの幽閉先から帰郷を果たしたアブドゥルケリーーム・ハンを中心に教育機関の整備が進められ、トゥルスン・エフエンディもまた城市に移って教員の養成に努めることになった⁽⁶⁹⁾。こうしてムーサー・バヨフ家やアブドゥルカーディルらが播種したカシュガル地方の新方式教育は、ハージー・アリーらが予測したように、一時的にせよ中国支配の手を離れた1933年以降に、より民族主義的傾向を鮮明にして束の間の春を迎えるのである。

文献略号

- A I : Atuš Ikisaq başlanguč mäktäp qurulğanligining 100 yilliğini hatiriläşkä täyyarlıq qiliş išhanisi, *Mäs'äl 1885-1985*, Ürümči, 1985.
- A K H : Ahmed Kemal Habibzade, *Čin-Turkistān Hatıralar*, Izmir, 1925.
- A K I : Ahmet Kemal İlkul, *Türkistan ve Çin Yollarında Untulmayan Hatıralar*, İstanbul, 1955.
- A T : Abdırıhim Tohti, *Qäşqärning Yeqinqi wä Haziriqi Zaman Maaripli Tarihi*, Qäşqär, 1986.
- E A : Ezizow Abdulla, "Musabayowlar karhanisining qisqičä tarihi", *Şinjang Tarih Matiriyalliri* (28), Ürümči, 1990, s. 189-28.
- H T : Hewir Tömür, *Abduqadir Damolla Haqqida Qissa*, Ürümči, 1990.
- MA : M. Ali Taşçı, *Esir Doğu Türkistan İçin: İsa Yusuf Alptekin'in Mucadele Hatıraları*, İstanbul, 1985.
- M H : Masami Hamada, "La transmission du mouvement nationaliste au Turkestan oriental (Xinjiang)", *Central Asian Survey*, Vol.9, No.1, pp.29-48, 1990.
- Q J : Qämärjan, "Milliy yuqiri inqilabiy demokrat Abdkerimhan Mähsum toğrisidä", *Qäşqär Şahiri Tarih Materialliri*(2), Qäşqär, 1988.
- S A : Säypidin Azizi, *Ömür Dastani(1) : Zulum Zindanlırida*, Beyjing, 1990.

註

- (1) Alan W. Fisher, "Ismail Gaspirali, Model Leader for Asia", Edward Allworth, ed., *Tatars of the Crimea: Their Struggle for Survival*, Duke Univ., 1988, pp.11-26. 小松久男『革命の中央アジア あるジャディードの肖像』(中東イスラム世界7) 東京大学出版会, 1996, 55-68頁参照。
- (2) M.H. 新免康「新疆ムスリム反乱(1931-34年)と秘密組織」『史学雑誌』99編12号, 1990, 2-8頁。王柯「東トルキスタン独立運動」の歴史』『海外事情』第44卷第6号, 1992, 38-39頁。一方、中国でもウイグル族の

研究者が中心となり、独自の「調査」によって数多くの「教育史」を發表している。AI. AT. Abdulla Talip, *Uyğur Maaripi Tarihidin Oöerklar, Urümči*, 1986. この他、*Şinjang Tarih Matiriyalliri*（新疆文史資料選輯）にも多数収録されている。これらを利用した研究報告として、小沢彰「近代ウイグル人教育と都市社会：19—20世紀初のカシュガル」『イスラムの都市性研究報告』研究報告編第44号、1989. がある。

- (3) *Vaqt* と *Şürā* の概要に関しては、Alexandre Bennigsen et Chantal Lemercier-Quelquejay, *La Presse et le Mouvement National chez les Musulmans de Russie avant 1920*, Paris, 1964, pp.72-76. 参照。
- (4) 片岡一忠『清朝新疆統治研究』雄山閣、1991, 169-172頁。
- (5) O.Lattimore, *Pivot of Asia: Sinkiang and the Inner Asian Frontier of China*, Boston, 1950, p.180. (ラティモア著中国研究所訳『アジアの焦点』弘文堂、1951, 237頁)
- (6) ムーサー・バヨフ家は東トルキスタンの羊毛や獸皮などの畜産物とロシアの工業製品を主な商品として扱っていたと思われる。彼らの経済活動に関しては、E A, 魏長洪「近代新疆民族工業的代表 — 伊犁玉山巴依製革廠」『新疆大学学報』(哲学社会科学版) 第21巻第4期、烏魯木齊、1993, 72-78頁参照。
- (7) *Vaqt*, No.808[1911/7/10, Hudāy Berdi]. 以下、『ワクト』の記事については、同様に号数、発行日、通信員または寄稿者の名（但し無記名の場合は省く）を記す。
- (8) *Vaqt*, No.693[1910/11/13, M.], No.512[1909/8/27], No.808[1911/7/10, Hudāy Berdi]. また、E A, s.202-208. 魏長洪、前掲論文、74-75頁参照。
- (9) 包爾漢『新疆五十年』北京、1984, 17頁。新疆社会科学院民族研究所『新疆簡史』第2冊、烏魯木齊、1985, 310頁。
- (10) *Vaqt*, No.782[1911/5/22], No.962[1912/4/27, M.Terjmāni].
- (11) *Vaqt*, No.949[1912/4/5], No.964[1912/5/1, M.Terjmāni].
- (12) *Vaqt*, No.973[1912/5/20, M.Terjmāni]. 和平協議がロシア領事館で行われたということが事実であれば、当然ながら、ロシア領事がその調停役を務めたのであろう。ただ、本稿では中国側の文書史料に目を通していなければ、断言は避けざるをえない。この記事は、当初イリ側代表が和平のために提示した条件の一つが、それまで各地方で独自に

発行されていた貨幣の統一であったことを伝える。従来の混乱した貨幣制度を改善することはグルジャの商人たちにとって切実な問題であった。また、この号には、楊纘緒とディヤーコフの二人を中心にしてイリ臨時政府とロシア側の要人が並ぶ写真が掲載されている。

- (13) 『新疆簡史』第2冊, 323-330頁。
- (14) 謝曉鐘『新疆游記』上海, 1925, 156-157頁。
- (15) A T., s.5-14.
- (16) M H., pp.29-34. 片岡, 前掲書, 202-205, 309-332頁。
- (17) 羅紹文「楊增新時期的新疆教育」『西北史地』第49期, 蘭州, 1993, 5
8頁。
- (18) Jarring Gunnar, *Prints from Kashgar: The Printing Office
of the Swedish Mission in Eastern Turkestan, History and
Production with an Attempt at a Bibliography*, Stockholm,
1991, pp.8-9.
- (19) Vaqt, No.1541 [1914/8/22, 'Uşmân Mamatuf], No.1644 [1914
/11/30, Hâjî Muhammad Nevrûz Hâjî oğlı].
- (20) 小松, 前掲書, 57頁。
- (21) Vaqt, No.485[1909/6/23].
- (22) Vaqt, No.693[1910/11/13, M.].
- (23) C.P.Skrine and Pamela Nightingale, *Macartney at Kashgar:
New Light on British, Chinese and Russian Activities in
Sinkiang, 1890-1918*, London, 1973, p.157. 1985年11月にウストュン・アルトウシュ郷イキサク村において、当地の小学校の開校百周年の記念式典が開催され、同時に記念論集(A I)が出版された。それに拠れば、ムーサー・バヨフ家のバハーウッティンは1885年に新疆で最初に新方式を採用した初等学校を当地に開いたという。それが事実とすれば、ガスプリンスキーが最初に模範校を開いた直後にカシュガルでも同様の教育が行われたことになるが、これにたいしてはウイグル族自身の中にも疑問を呈する者があり(S A, s.143-144), その年代確定のための史料が未だ提示されていない段階では、これを事実と断定することはできない。筆者は、文化革命後に「宗教」と「民族」の復権を見たウイグル族が自民族の文化の高揚を願い、1985年に式典を行うために、遡って1885年の開校が「歴史的事実」とされたのではないかと考える。しかしながら、ムーサー・バヨフ家が1907-8年以前にも何らかの教育活動を行っていた可能性は完全に否定されるものではない。

- (24) *Vaqt*, No.577[1910/2/9], No.634[1910/6/26], No.650[1910/8/3], No.1492[1914/5/23, Uygur Balāsi], No.1565[1914/8/22, Z.Besiri]など多数の記事がある。
- (25) *Vaqt*, No.1420[1914/2/20, Nu'mān Tursunof], No.2037[1916/5/25, Nūširvān Yaušef].『シューラー』にアブドゥルカーディルの論文が掲載された際、編集者は彼の著書 *Javāhir al-iqān* を紹介し、それを最初に目にした時の感想を「その著者はシャーム（シリア）かミスル（エジプト）の学者の一人であると判断していた。ブハラで学んだことで、アラブ語でこれほど能弁なるカスイーダを語りうる人がいることは私の記憶にはなかった」と述べて称賛した（*Šūrā*, 1915-23, s.722）。これを機にアブドゥルカーディルとは何者かという報告が『シューラー』誌上を賑わせた（*Šūrā*, 1916-7, s.183, 1917-1, s.24）。H T, s.12-16.には、『シューラー』に掲載されたという彼の一文が引用されている。筆者は原文を確認することができなかつたが、それには以下のように書かれている。彼はアルトウシュの出身で、後にコーカンドで2年間学び、1890年代の8年間をブハラに学んだ。1907年に巡礼を行い、その帰路イスタンブルとミスルにそれぞれ2ヶ月ほど滞在して、当地の進歩的な学者たちと友誼を交わした。帰郷した後、彼はカシュガルで人々を進歩、革新、改革へと導くことに努めたが、これが原因で故郷から去らねばならなくなつた。再びコーカンドとブハラで過ごした後、1911年にカシュガルに帰郷した。
- (26) *Vaqt*, No.546[1909/10/19].
- (27) MH, p.34.
- (28) *Vaqt*, No.451[1909/4/9], No.643[1910/7/17], No.645[1910/7/22].
- (29) *Vaqt*, No.972[1912/5/18], No.1093[1912/12/25, M.Š.], No.1152[1913/3/13], No.1192[1913/5/4, M. Šeyhof], No.1311[1913/10/3].
- (30) *Vaqt*, No.1293[1913/9/10, Ğuljalı].この記事はイスタンブルで刊行された『テュルク・ユルドゥ』誌に転載された（*Türk Yurdu*, 5-2 [50], s.911-912）。これにより、オスマン帝国に好意を示すムーサー・バヨフ家のバハーウッディンの名はトルコ人の間にも知られることになつたであろう。
- (31) *Vaqt*, No.2037[1916/5/25, Nūširvān Yaušef].この時、アブドゥルカーディルが教師を辞めた理由は明らかではない。彼はムダッリス（マドラサ教授）であるとともに著作活動でも多くの業績を残し（H T, s.353），多忙であったと思われる。恐らく、彼は、新方式学校の基礎を

築いた後には、日々の授業のようなルーチンな仕事ならば後任に委ねうると考えたのであろう。

- (32) A K I, s.18-20. アフメト・ケマルはA K Iを出版する以前にA K Hを著しているが、両著の記述にはかなりの違いが観られる(M H, note 36. 参照)。本稿では、出版時期とその記述内容の具体性からA K Hを主に利用する。しかし、両著ともに回想録故の、事実の改竄や誇張の危険性を伴うものであることを付言する必要がある(註 34, 58参照)。本稿において『ワクト』の記事を併せて参照することは、既に濱田氏が紹介しているアフメト・ケマルの活動経緯を改めて確認することになろう。
- (33) A K H, s.22-35.
- (34) A K H, s.35-45. 不思議なことに、A K Iの中にウマル・バイの名は全く挙げられていない。実際には、当時のカシュガルでは反対派のウマル・バイにも相当な非難が向けられていたことはA K Hとともに『ワクト』の記事からも窺われる。Vaqt, No.1813[1915/7/4, Nūšīrvān Yaušef], No.2037[1916/5/25, Nūšīrvān Yaušef]。アフメト・ケマルはA K Iにおいて、保守派にたいする改革派としての自分の活動とその功績を強調するために、セリーム・アフンという宗教権威を第一の敵対者として記す必要があったのであろう。
- (35) Vaqt, No.1795[1915/5/30, Nūšīrvān Yaušef]。この記事の中でAhūnbāyofと記されているのは、屡々‘Umar Ahūnd Bāyと呼ばれるウマル・バイのことであると判断した。
- (36) S A, s.135. カシュガル城市における中国当局とウマル・バイの関係と同様に、ウストュン・アルトゥシュではムーサー・バヨフ家も中国当局と何らかの利害関係を共有していたと思われる。グルジャではフセインは家畜税の請負の権利を求めて当局と争ったことがあった(謝、前掲書, 156頁)。
- (37) A K H, s.30-31.
- (38) Vaqt, No.1930[1915/12/3, Nūšīrvān Yaušef]。包爾漢、前掲書, 80頁。
- (39) A K H, s.107-108.
- (40) Vaqt, No.2037[1916/5/25, Nūšīrvān Yaušef].
- (41) 小松、前掲書, 59-60頁。
- (42) Vaqt, No.1820[1915/7/12, Nūšīrvān Yaušef]。Hamid Allāh Tarim, *Turkistān Tārihi* [Turkistān 1331-1337 Inqilāb Tārihi], Istanbul, 1983(?), s.222.

- (43) A K H , s.35-36. A K I , s.55-56.
- (44) A K I , s.54.
- (45) A K H , s.31.
- (46) A K H , s.40-44. A K I , s.60.
- (47) A K H , s.56.
- (48) A K H , s.44.
- (49) 楊增新『補過齋文牘』辛集二, 34b.
- (50) A K H , s.51-54. A K I , s.63-65. *Vaqt*, No.1816[1915/7/8, Nūširvān Yaušef], No.1860[1915/9/3, 'Abd al-Rahim].
- (51) A K H , s.56-63. A K I , s.66. *Vaqt*, No.1860[1915/9/3, 'Abd al-Rahim], No.2037[1916/5/25, Nūširvān Yaušef].
- (52) M H , p.37.
- (53) *Vaqt*, No.1644 [1914/11/30, Hāji Muhammād Nevrüz Hāji oglı]. ハージー・アリーは Nevrüz zāde Hāji Muhammād 'Ali と呼ばれている。A K H , s.30.
- (54) A K H , s.63.
- (55) カシュガルを訪れたあるロシア籍タタール人は、「現在、この（漢語）学校は全く無用となった。—（略）—学んで少しでも目が開かれたなら、政府の言葉（即ち漢語）の必要性もわかるであろう」と述べている。*Vaqt*, No.1816[1915/7/8, Nūširvān Yaušef].
- (56) 濱田正美「塩の義務」と「聖戦」との間で』『東洋史研究』第52巻第2号, 1993, 122-148頁。
- (57) *Vaqt*, No.1206[1913/5/4]. この「北京の議会」とは1913年4月から断続的に開かれた国会のことである。新疆省からも衆議院、参議院にそれぞれ10名づつが選ばれたが、その議員資格の中には「漢語に精通した者」という規定があったために、実際にはトルコ系ムスリムの中から議員を送りだすのは容易なことではなかった。国会に関しては、教育部主編『中華民国建国史』第二篇民初時期（1），台北，1987，521-585頁参照。
- (58) M H , pp.39-40. アフメト・ケマルは、ヤールバーグの学校の開校当日の様子を、「この日は意義と名誉によって格別の日であった。トルコ Türkiye の影響とトルコ人 Türk の栄誉が各所に沸き立つののが観られた」（A K H , s.69）と述懐し、そこで漢語による教育が行われた事実を故意に隠蔽している。
- (59) A I , s.49-51. これはトゥルスン・エフェンディの息子で、自身も

- 1952年から58年までイキサク小学校で校長を務めた Iminjän Tursun が執筆したものである。
- (60) 陳慧生「楊增新對待新思潮的態度」『西域史論叢』第一輯，烏魯木齊，1985, 250-266 頁。『新疆簡史』第三冊，烏魯木齊，1987, 55-59 頁参照。
 - (61) S A, s.40-45. H T, s.354.
 - (62) Q J, s.95-96.
 - (63) A I, s.10. バハーウッディンがグルジャで死んだ後、ムーサー・バヨフ家は留学生にたいする援助を停止した。A I, s.58.
 - (64) MA, s.68, 105, 111.
 - (65) MA, s.73.
 - (66) MA, s.73.
 - (67) MA, s.106, 113.
 - (68) Abduqadir Haji, "1933-yildin 1937-yilgičä Qäšqär, Hotän, Aqsularda bolup ötkän wäqälär", *Sinjang Tarih Matiriyalliri* (17), Ürümqi, 1986, s.6-9.
 - (69) A I, s.19. Q J, s.96-97.

〔付記〕 本稿の作成にあたり、小松久男先生と堀直先生から貴重な史料の提供を受けた。ここに記して謝意を表したい。

